談論

老と青の化学反応

成瀬　正

19日は敬老の日であった。いつの間にか私も敬われる側になってしまった。還暦を迎えた時には、23で社会人になった延長線上に立っている感じで何の感慨もなかった。

61の春に今の会社に移り、いきなり秋にリーマンショックに遭遇した。5、6年の間は余裕もなく歳の事など考えることもなかったが、少し余裕ができたからか、来年の1月に70の大台に乗るからかは分からないが、最近、物の見方や感じ方が変わって来たような気がしている。

以前は、物事の輪郭がはっきりしないと気が済まなかったが、今は輪郭がぼんやりして徐々に染み出してくる物事でも、あるがままに受け入れるという感覚である。読書も、ガツガツ知識を仕入れると言うより、気ままに読むうちに心に沁みた時に体内にスーと入って来るという感じである。これが老人になるという事であれば、老人になる事も悪くはないと思っている。ヘルマン・ヘッセも書いている。

「老年は青年に劣るものではない。赤は青より悪くはない。老年が青春を演じようとするときにのみ、老年は卑しいものとなる」と。

我社の社員の平均年令は若いが互いにリスペクトすることによる化学反応こそ、我社の発展と飛躍の原動力である。そして、私自身もこれからもまだまだ学ぶべき事がたくさんあると感じている。最近読んだ夏目漱石の「点頭録」の一節を紹介してこの稿を閉じたいと思う。

「趙州和尚という有名な唐の坊さんは、六十一になってから初めて道に志した奇特な心懸けの人である。七歳の童児なりとも、我に勝るものには我すなわち問わん、百歳の老翁なりとも我に及ばざる者すなわち侫を教えんといって、二十年間修行を継続し八十になってしまった。それから趙州の観音院に移って、はじめて人に得度しだした。百二十の高齢に至るまで化導をもっぱらにした」

（新報国製鉄社長）

2016年(平成28年)9月23日
鉄鋼新聞
※掲載許可取得済